

九月に入ると秋のキノコの季節になる。我が家の敷地で収穫できるのは限られているが、それでもタマゴタケ、ヤナギタケなどは毎年、食卓に季節を運んでくれる。ただ、キノコはタイムリングを逃すとナメクジに先に食べられてしまう。この頃になると散歩と称して先手を打って目星をつけた場所や木を見て歩くのが日課になる。キノコが大好きなのはナメクジだけでは無い。スーパーで売っている栽培したキノコはそのまま調理できるが、自然に生えたキノコはしばしば水につけておく必要がある。そうするとキノコのヒダの奥から小さな虫がうじゃうじゃ出てくる。これを見ると一瞬、食欲が後退するが酒のあてのことを思うと見なかつた気持ちになる。この頃になると、いろいろ気をかけていただいているMさんも、どこからか採って来たヒラタケやタモギタケなどをどっさり持って来てくれる。それも夕方に突然電話が掛かってきて「石塚さんヒラタケ食べないかい。」と言って持って来てくれる。この突然のプレゼントはいつも嬉しい。

この頃にはノギクが咲き始める。ノギクは大きなコロニーをつくっているのが花畑のようになる。花の色も白が多いが、鮮やかな紫色や赤色も混じって賑やかだ。ノギクに負けじとセイタカアワダチソウも黄色の花が開き始める。ハンゴンソウも同じく少し大きめの黄色の花を咲かせる。セイタカアワダチソウもハンゴンソウもコロニーをつくっているが、園路の両側に陣取っていて競い合って咲いている。

九月といえば竹山神社祭が行われる月だ。第三日曜日と決まっっていて町内の人たちで境内を掃除し、お参りをする。昔は人出も多かったと聞くが、今は十数人程度が参加する程度だ。お参りし、その後、地区の会館に集まり小宴を催す。小宴といってもここ数年はコロナ禍でお茶とお菓子程度で済ませているが、それでも互いに近況をのんびり語り合う時間は貴重だ。集まるのはほとんど七、八十代なので、元気な顔を見れるのも嬉しい。最近の話題は、夏の暑さと秋の大雨のことで、今まであまりこんなことがなかったという。

十月、十一月と周りの景色もどんどん変わってくる。ヤチダモは、うちの敷地の中では葉を茂らせるのが一番遅いが、黄色に色づき落葉し始めるのも早い。この頃の空はパツと抜けたような青空が広がり大きく見える。十月も中旬になるとグツと冷え込む日もある。そんな朝は土間の薪ストーブに火をつけて湯を沸かしコーヒーを入れる。暖かいコーヒーが喉を通り過ぎお腹に収まる感覚を楽しみながらオレンジ色の炎を見ているのは気持ち落ち着く。冷え込む日に合わせて木々も紅色や黄色に一気に変わってくる。秋の澄んだ日差しを逆光に透かして見るヤマモミジの紅色は心までしみてくる。イタヤカエデも黄色も加わりそれらが道を埋め尽くす景色は絵に描いたようだ。

紅色や黄色の落ち葉に見とれてばかりはいられない。また今年も冬を迎える準備を始めなければならぬ。初雪は年によってかなり差がある。ここに来て一番早かったのが十月二十一日で最も遅かったのは十一月二十三日だった。

